



～カムパネルラとは～

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol. 28 2012年5月号

- 読み聞かせを超える絵本二冊・・・・・・・・・・・・・・・・・・西城 潔
- ゆっくりゆっくり、まっすぐまっすぐ・・・・・・・・・・・・藤田 博
- これからも語り継がれる・・・・・・・・・・・・・・・・・・安田 暁人
- 春が来た喜びを教えてくれるこの一冊・・・・・・・・・・霧田 伸枝
- 新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博

■ 読み聞かせを超える絵本二冊

西城 潔

なかむらみつる『やさしいあくま』(幻冬舎)



これまでわが家の子どもたちと一緒に読んだ中で、もっとも印象に残っているのが本書です。この物語には、病気のおばあちゃんと2人きりで暮らす男の子「フウ」と、「チュッチュ」という悪魔が登場します。2人はある日、大きな木の下で知り合います。病気のおばあちゃんのこととみんなから仲間外れにされていたフウと、一人ぼっちのチュッチュは仲良しになり、毎日いろんなことをして遊びました。日に日に二人の絆は深まり、しだいにお互いがかけがえのない存在になっていきます。

ある日のこと、町へお医者さんと呼びに行ったフウが家に戻ってくると、チュッチュが、おばあちゃんの体から何かを取り出して飲み込んでいるではありませんか。やがてチュッチュは唸り声をあげ、大きな化け物に変身します。「おまえのばあさんのいのちはおいしかったよ」「おまえをあんしんさせて、おまえらをたべるすきをいまかいまかとまっていたんだよ」友達と信じきっていたチュッチュの恐ろしい言葉に、フウは涙ながらに棒きれをもって立ち向かいます。フウが棒きれで打つと、チュッチュは叫び声をあげて逃げ去ってしまいました。すると、それまで意地悪だった町の人たちは、悪魔を退治したフウをほめたたえてくれるのです。

さて、一体こんなチュッチュのどこが「やさしい」というのでしょうか？そう、思ってもみないチュッチュのやさしさが明かされるのは、実はここからなのです。子どもたちとその部分を読み進むうち、哀しくも感動的な展開に、私は声が震え出し、涙がどうにも止まらなくなって、膝上に抱いていた娘の服に鼻水をポタポタと垂らしてしまいました。「やさしさとは？」について考えさせられた一冊です。

小風さち・文／山口マオ・絵『わにわにのおふろ』(福音館書店)



一匹のわにがおふろに入り、中でいろんな遊びを楽しみ、あがるまでの一連の様子を描いた絵本です。設定は荒唐無稽ながら、版を重ねていることからわかる通り、子どもの心をつかむ魅力に満ちています。また娘にせがまれて毎日のように読んでやっているうち、私自身もすっかり本書が好きになりました。その不思議な魅力は、さまざまな擬音語やリズム感にありそうです。蛇口を「きゅるり きゅるり きゅるり」とひねると、お湯が「じゃば じゃば じゃば」と出てきます。わにがおふろにもぐり込む時の「じょろろーん！」という音は、重量感ある体が湯船の縁から滑り落ちる様子をよく表わしています。お湯に浮かべたおもちゃの発する「ぽくん ぽくん ぷくん」という響きには、なんだか癒されます。床に敷いたタオルで体を拭く時の「ぐにっ ぐにっ ぐなっ ぐなっ」という音からは、ヨロイのように堅くて、しかも弾力に富むわにの皮膚（触ったことはありませんが）の質感が伝わってくる気がします。お湯にもぐって「じーっと」体を温める場面も印象的。本書に出会ってから、子どもとのおふろの楽しみが増しました。幼児向けの本ですが、くり返し、できれば音読してみると、いつのまにか本書の魅力にとりつかれてしまうことでしょう。

※「やさしいあくま」／なかむらみつる／幻冬舎

※「わにわにのおふろ」／小風さち文・山口マオ絵／福音館書店

(社会科教育講座)

「ゆっくり」と「まっすぐ」が矛盾したものに思えるのは、「早く」行く、そのためにこそ「まっすぐ」だからです。道草を食うのは「遅い」ことの典型、常識を超えた「ゆっくりゆっくり」が、常識を超えた「まっすぐまっすぐ」を生み出しているのです。



「おじさん おじさん いま なんじ」、ユン・ソクチュン文・イ・ヨンギョン絵・かみやにじ訳『よじはん よじはん』(福音館書店)は、時間を聞きに行く「おんなのこ」に始まります。家に時計がない、そのため「となりの みせ」に聞きに行く、行かされるのです。「よじはん」が「おじさん」の答え。その答えを持って「おんなのこ」の道草が始まります。「にわとりが みず のんでる ちょっと みていこう」、「ありが なにか はこんでる どこへ もっていくのかな」、「おしろいばなが いっぱい みつ あまいかな」。にわとりを見れば、足を止める、足を止めては、ありを見る、すべて好奇心のなせること、「おんなのこ」は好奇心のかたまりなのです。そこから道草が大好きな訳が見えてきます。

この間、確実に時間は経っています。にもかかわらず、「かあさん かあさん いま よじはん だって」がお使いの答えです。「よじはん」としたのは、それが黄昏時、境目の時間だからに違いありません。その隙間に向こう側へとはみ出す、道くさがある種のタイムスリップに思えるということ。「よじはん」と聞いた「おかあさん」は、この子のことだから道草してきたに決まっている、道草はいつものこと、だからその分の時間を頭の中で加えているのかもしれないのです。

ヘレン・バックレイ作・ポール・ガルドン絵・大庭みな子訳『ゆっくりおじいちゃんとぼく』(佑学社)の「おじいちゃんと ぼく」は、「さんぽに いきます ゆっくり ゆっくり あるきます」、「ゆっくり あるいて とどき たちどまり いろんなものを ゆっくり ながめます」。「おかあさんは おおいそぎ」、「おとうさんは おおいそぎ」、「おかあさん」が急ぐのは、「おとうさん」が急ぐのは、目的があるから、早く着きたい、着かなければと思うから。追われる時間の中にある大人なのがわかります。「みんな おおいそぎ くるまも バスも でんしゃも ふねも おおいそぎで おおさわぎ」なのもそのためです。

「おじいちゃんと ぼく」がゆっくりなのは、目的を持たないから、いつでも足を止め、「ゆっくりながめ」るからなのです。「おじいちゃんと ぼくは ゆっくり いすを ゆすります」、「“いそぎなさい”と だれかがいうまで」。「だれか」が「誰か」はわからない、それでも急ぐ大人であることはわかります。



マーガレット・ワイズ・ブラウン作・坪井郁美文・林明子絵『ぼくは あるいた まっすぐ まっすぐ』(ペンギン社)は、「おばあちゃん」からの電話で始まります。「うちの まえの みちを まっすぐ いって いなかみちを まっすぐ まっすぐ」と言われて、「おばあちゃん」の家に向かって歩き出します。「これは なんだろう こわいものかな？」赤い花です。目に入るものに足を止める、その度に逸れてしまいます。それでも「まっすぐ まっすぐ」の繰り返し。「これは なんだろう こわいものかな？」野いちごです。「ずいぶん たかい」山は後向きに登り、後向きに降ります。そうすることがおばあちゃんのところに行く「近道」なのです。そうでなければ行くことができない、遅いが早い、遠いが近い「さかさま」の世界がそこにあります。

「ぼく」が「まっすぐ」進んでいないのは明らか、それでも、「おばあちゃん」の家に行くことができたのは、「おばあちゃん」が電話で言った「まっすぐ」の意図が伝わったからです。「ぼく」のことがよくわかっていたと言えます。最初のページに、額に入った「おばあちゃん」の写真が、最後のページに、額に入った「ぼく」の写真が見えています。テーブル越しに取ってきた野いちごを手渡します。テーブルには取ってきた花が見えています。

「おじいちゃんと ぼく」、「おばあちゃんと ぼく」が仲良しなのは、生産年令から外れている、外れた者同士だからと言えます。「おじいちゃん」と「おばあちゃん」は「既に」、「ぼく」は「未だ」の違いこそあるものの、背中合わせで一つなのです。道草を食う、否定的なもの、否定の対象とされるものも、ここでならポジティブです。

『よじはん よじはん』では、「おじいちゃん」「おばあちゃん」でなく、「おかあさん」。時計のない暮らしの中での「おかあさん」、時間を聞いてくるのを待つ「おかあさん」なのです。

※「よじはん よじはん」ユン・ソクチュン文・イ・ヨンギョン絵・かみやにじ訳/福音館書店

※「ゆっくりおじいちゃんとぼく」ヘレン・バックレイ作・ポール・ガルドン絵・大庭みな子訳/佑学社

※「ぼくは あるいた まっすぐ まっすぐ」マーガレット・ワイズ・ブラウン作・坪井郁美文・林明子絵/ペンギン社

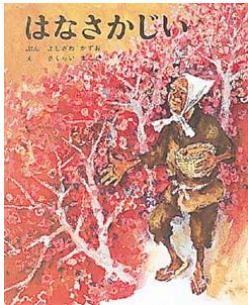
(英語教育講座)

■ これからも語り継がれる

安田 暁人

水よう日のあさは、いつもよみきかせの先生がきてくれます。わたしは、よみきかせがすきです。本に口があるようによんでくれるところがすきです。いつも本をよんでもらっているとき、おもしろすぎてみんなから、「おお」と、こえが出てしまいます。それをきくと、こころが一つになっているなとおもいます。よんでくれている先生のこえがきこえなくなるから、ほんとうはやめたほうがいいけど、みんなのたのしいきもちがわかるから、わたしは「おお」というこえがすきです。

これは、昨年度、私が担任していた学級の子どもの作文を抜粋したものです。子どもたちは読み聞かせが大好きで、水曜日の朝が来るのを心待ちにしていました。作文からも、夢中になって聞き入り、心まで一つになっている様子が伝わってきます。



大好きな読み聞かせの中で、『はなさかじい』を取り上げていただいたことがあります。誰もが知っている昔話です。予想通り、「知ってる」「読んだことある」「絵本を持ってるよ」と、自信たっぷりに読書歴を披露し始めたのですが……。聞き始めると、様子が変わりました。

「犬を拾ってくるとき、こんなことがあったの？知らなかった……。」

「あれ？犬の名前が出てこないよ。名前は“しろ”じゃなかったかな？」

「ぼくが知っている“はなさかじいさん”では、犬は“ぼち”だよ？」

「犬に乗って山に行くの？ぼちは子犬だったのに。」

「わたしの知っている“はなさかじいさん”と似ているけどちがう！」

国語の学習に、「むかしばなしをたのしもう」という教材があります。昔話特有の話の展開のおもしろさや独特の言い回し、語り口調に気付くこと、古くから親しまれてきた昔話の魅力を味わうことをねらいとした学習です。大好きな読み聞かせは、子どもたちをあっという間に、その学習の入り口に立たせてくれました。休み時間には、競うようにして図書室に向かい、『はなさかじい』を探し求めました。そして、5冊の『はなさかじい』を見付け出し、読み比べを始めました。

「この『はなさかじい』は、犬の名前が“しろ”だ。」

「こっちはやっぱり“ぼち”だよ。でも、大きい犬みたいだ。」

「こっちの『はなさかじい』のお話は、最後に意地悪なおじいさんが牢屋に入れられている。」

「意地悪なおじいさんが、お殿様にいっぱい叩かれて終わる『はなさかじい』もあるよ。」

「同じ『はなさかじい』なのに、なんで違うんだろう？」

「分かった！書いた人が知っている『はなさかじい』なんだ。」

「みんな『はなさかじい』は知っているけど、みんな違うんだね。いろいろな人がお話を作っていいんだよ、きっと。」

子どもたちは、古くから親しまれ、語り継がれてきた昔話の特徴に気付き始め、

「どうして、人気があるのだろう。昔から語り継がれ、いろんな人が本にして書き残しているのは、なぜだろうね。」

と、学習の核心に近づくことができました。

「知っている」と昔話を侮ることなかれ。

そこには声に出して読む、音にして聞く楽しさがあります。善行がよい結果につながる力強い例示であったり、勇気や親切を奨励していたりする理解しやすい物語です。細部の違いに加えて、作者により異なった表現を見ることができます。長く子どもたちに愛され続けてきた架空の物語は、これからも少しずつ細部を変えながら愛され続けていくのだと感じます。今度は、子どもたちを語り手として。

この学習が一段落したある日、子どもが本を抱えて図書室から帰ってきました。

「先生！『いっすんぼうし』は7冊もあったよ！」

昔話は、これからも語り継がれていく、そう強く感じました。

※ 「はなさかじい」／よしざわかずお文・さくらいまこと絵／ポプラ社

(附属小学校教諭)

■ 春が来た喜びを教えてくれるこの一冊

ジーン・ジオン・文／マーガレット・ブロイ・グレアム・絵／こみやゆう・訳 『はるがきた』（主婦の友社）

轟田 伸枝



「カレンダーを みても はるは すぐそこ。でも、・・・はるは まだ、どこにも みあたりません。」例年に比べ寒さの厳しかった今年は、春がなかなかやって来ませんでした。この絵本のようにです。「春はまだかな」と、南風が吹き、花が咲き、緑が広がる春を待っていた人は多かったはず。私もその一人です。『はるがきた』に会ったのは、そうした時でした。

春を待つだけの大人たちに、男の子が話しかけます。「ねえ！ どうして はるを まってなきゃいけないの？ まってなんか いらないでさ、ぼくたちで まちを はるに しようよ！」男の子の提案に大人たちは大賛成。市長を先頭に、町を春にするプランが市民総出で実行に移されます。手に手にペンキとはけ、はしごを持って、町中に絵を描き始めるのです。家の塀にビルの壁、店の日よけに街灯、銀行の柱にガスタンク、あらゆるものに春を描きます。草や木の緑、花や太陽の黄、川や鳥の青——灰色だった街に鮮やかな色が広がります。男の子のひらめきから、街が春の色に包まれていくのです。

その夜、激しい雨が。みんなで描いた絵が消えてしまいました。「春」がなくなってしまいました。ところが、それは春を連れてやってきた雨だったのです。一夜にしてたんぽぽが咲き、わかばが芽生え、動物たちが顔を出す、「まちに まった、ほんものの はるが やってきたのです！」

春の訪れを待ち遠しく思っていた時、この絵本は私の心に「春」をつくり出してくれました。ここには、青と黄と緑の絵の具だけで見事な春が描き出されています。細かいところに遊び心が溢れています。絵が文に、文が絵に寄り添うように描かれています。夫婦だからこそのコンビネーションが生み出した傑作です。これを読むと、自ら何かが行動しようという気持ちがわき上がってきます。男の子のように、自分の考えを提案してみたい。そうすることで世界が動くような気がしてくるのです。

（英語コミュニケーションコース4年）

■ 新刊紹介

小林 豊『とうさんと ぼくと 風のたび』（ポプラ社）



「春がきた。・・・あたたかな風に さそわれて、とうさんと ぼくは たびにでた。風の ふいてくるところへ むかって。」「たびにでた」の「たび」は、当たり前旅ではなく、「とうさん」の子どものころにタイムスリップしたものに思えます。「とうさんとぼく」とが旅をする意味もそこにすることになります。その旅では、「いつもとおなじ けしきが きょうは ちがって みえる」のです。「おなじ」と「ちがって」がゆらぎを見せる、日常性と非日常性のはざまに落ち込んだ奇妙な感覚がそこから生まれます。

春が来たのを知らせるため「野山を おこして まわってる」「山のひと」の後をたどります。その人の唱える「みづち のっち くくのっち さくら しゃぐち さか しゃくる」が、「風のくに」はどこにあるかを教えてくれているようです。「風の ふいてくるところへ むかって」は、時間をさかのぼることを意味します。時間だけではない、空間も越えていくのです。いつの間にか国境も越えたのかもしれない。韓国風の帽子をかぶった人が見えるからです。「風は むかしから おなじ道を かよってくるんだ」、変わることと変わらないこと、その隙間を風は吹き抜けていくのです。

「風が さかを おりてくる。」坂は境、坂を上ると峠です。「とうげで、風が しずかに うごきを とめた。ずうっと とおくに 地平が みえる。」峠も境、「風のくに」が見えるかもしれません。「わたしぶねの おじいさんが、むかしのうたを うたっている。ちりや ちりちり しゃんなら しゃんなら」「おじいさん」が昔の人とすれば、「むかしのうた」はそのまた昔。そのまた昔の「おじいさん」も同じ歌を歌っているに違いありません。そこはいくつもの時代がまじり合い、重なり合った場、いつの時代かわからない、いつの時代であってもかまわない場です。「しらない においが 風と まじりあっている」そこは、変わることもない風が作り出す場なのです。

「さあ、いよいよ ここからが 風のくにの いりぐちだ」、ここまで来て「いよいよ」と聞かされ、ではこれまではと驚かされます。はるかに遠い、遠いその先から風は吹いてくるということなのです。「ぼく」はこう言います、「風は もっとむこうから ふいてくるよ。」

（藤田 博）

発行：宮城教育大学附属図書館